

松川勇記日誌について

一世代は三十年と言われるが、これは、私（松川洋子）や和博兄の父・巖の、そのまた父親である松川勇記（明治11年9月生・昭和20年6月死去）の最晩年の日誌で、二世代六十年以上も前に書かれている。この祖父と私の生年月日の間には70年の懸隔がある。戦後生まれの私が産声を上げた頃には、このお爺様は既に鬼籍の人として生存しておらず、お互い会うことはかなわなかった。

何がきっかけだったか、記憶はおぼろげになるが随分以前、和博兄がこの松川勇記日誌を私に預けることとなった。日誌を覗いて、漢字カタカナ混じりの、文語体に近い恐ろしいほど極細のペンで小さく書き進められた几帳面な文字の羅列に、祖父の厳格な性格と端正な面影を垣間見たような気がして、大層心惹かれた思いとともに、この中には貴重なものが書かれ、残されていると感じることが出来た。

しかし預かったまま長い期間に渡って手元に置きながら、青虫が芽吹いたばかりの柔らかな葉っぱをかじるように、所々を少しずつ通読するだけで、そのままに放置していたのは、一貫して読み解くだけの根気のなさ、日常の些事に流されてばかりの生活のためだった。

今年2010年3月、65歳を契機に退職し、決められた時間から自由になった夫は、この日誌にただならぬ興味を示した。毎日決まった時間を割当て、旧漢字一字一句を漢和辞典から判読し、読み解くのが必ずしも容易でない難解ともいえるカタカナ文字を推理し、優秀な日本語ソフト「一太郎」でパソコンに打ち込んで、蟻のごとき堅実な歩みで、松川勇記日誌のファイルを作り続けた。まるで以前、ドイツ語の古い飾り文字の本を翻訳していたような具合に。かれの学者気質に敬服して脱帽。

この日誌一冊に記載されている昭和11年12月1日から昭和19年5月までの約七年半（90ヶ月）の日記のうち、ようやくこの度、最初の七ヶ月分を判読し終えて、夫のホームページに一ヶ月分

ずつ掲載することにした。(いまだ不明で判読不可能の箇所には??のマークが付されている。)

多分、一番面白く読んでくれるのは和博兄や私の姉妹だろうが、ひょっとして興味を持ってくださる不特定多数の読者方のために、ホームページのURLを下記に誌しておきます。インターネット時代の便利さを利用して、是非アクセスしご一読頂ければ嬉しく思います。(田中洋子)(2010-10-25)

<http://homepage3.nifty.com/appleorange/>

松川勇記日誌の打ち込みを終えて

虎は死して皮を残し、人は死して名を残すと言われるが、松川勇記氏は死して「日誌」を残した。

日誌は縦13cm横14cmの、表裏表紙を附けた素朴な物である。現代の日記の様に、日付けまで記入され、一年ごとに纏まった形式のものとは遠くかけ離れた、白い紙を閉じて作られた簡単明快なものである。

残された日誌は、それを保管する者が居なければ当然の如く消失してしまう。我々の普段の生活を考えてみよう。古い物は情け容赦もなく捨て去られ、百年間の保存に耐えるものは、紙質の物では非常に稀である。夏目漱石が「夢十夜」のなかで、まさに死に行く女人に語らせた「百年後」にまたここへ姿を見せませ、待っていて下さい!という表現は、深い意味を帯びて、その不可能性を反響させるであろう。幸いなるかな!!松川家には、勇記日誌をしっかりと現在まで保管した人が存在したのである。

松川勇記日誌は昭和11年12月1日から書き始められる。翌年3月の年度末に、唐津郵便局長を退職。居住地は福岡に変わる。

長い期間に渡る記述の途中を飛ばせば、日誌は昭和19年5月某日突然中断する。開始から終焉まで実に90ヶ月、7年半に渡って、僅かに二度の中断(それにもちゃんとした理由がある)を除けば、ほぼ継続的に書き進められていく。

人間到る処青山あり。それと同様、日誌の突然の中断は何等不思議ではない。日誌もやはり人生そのものと同様、何時の日にか、思いがけぬ中断によって終止符を打たれるのは理の当然である。またその日が何時であろうとも自然の流れであろう。

極細のペンを使用して書き進められる旧漢字カタカナ交じり文は、句読点を用いず、草書に近い達筆と相まって、判読の作業は必ずしも容易ではなかった。それだけにこの作業が一応終了した地点では、やり終えたというかなりの達成感と充足度を味わうことが出来た。

併し「青空文庫」のように、打ち込み手とその編集者が同一人物であってはならないという不文律は、この日誌には適用されていない。自慢ではないが、殆ど単独でパソコンと睨みっこの作業を一步一步進行させた。

ただし途中から、思いも掛けず、当方の伴侶である田中洋子姫君の援助を受けることになった。彼女は勇記氏の孫娘に当たり、凡そ70年の時を隔てて、何らかの意味合いでこの几帳面なお爺様に繋がっていたのであらうと思われる。

日誌を機械可読なファイルにする為の、パソコンでの打ち込み作業は辛気くさいことこの上なく、単なる根気と辛抱強さだけではなかなか継続しがたい所がある。しかし常に作業者の傍らに寄り添う様にして、打ち込み作業を見守っている人の存在は、どこかで人に不思議な力を与える地蔵観音の様な働きを及ぼす。

ある時、如何なる切っ掛けだったか、その女人菩薩は突如自分でも作業を遣ってみようと思い立ったのである。

ここに於いて「青空文庫」で決められた規程同様、打ち込み手とその編集者は別人でなければならぬという本来の役割が定められた。出来得ればもっと以前にその決心があれば、作業はもっとスムーズに進行し得たろうが、そうであったなら、当方の打ち込み完成の満足度も少々変化していたにちがいない。

(たなかゆたか) (2011-5-30)